

## 2012 年度先端社会研究所シンポジウム

### 女性の社会参加のための情報通信技術（ICT）

#### －香港と中国、日本をつなぐ－

吉 野 太 郎

（関西学院大学総合政策学部専任講師）

2013 年 1 月 13 日、先端社会研究所と総合政策学部吉野太郎研究室主催のシンポジウムを開催した。詳細は次の通りである。

#### 【シンポジウム名】

女性の社会参加のための情報通信技術（ICT）－香港と中国、日本をつなぐ－

【日時】 2013 年 1 月 13 日（日）13:00～16:30

【場所】 関西学院大学上ヶ原キャンパス大学院 1 号館 201 号室

【主催】 先端社会研究所・吉野太郎研究室

#### 【概要】

情報通信技術（ICT）は今日コミュニケーションのための重要なツールとして、社会運動や女性の社会的参加のためにも使われてきている。さらに近年の社会運動への SNS（ソーシャルネットワークワーキングサービス）活用が進展している。本シンポジウムでは ICT とメディアおよびジェンダー・フェミニズム、香港におけるバックラッシュ、日本においてミニメディアとマスメディアをつなぐものについて講演いただく。その後にパネルディスカッションを行い、香港および中国の事例が日本において持つ意味を議論する場とする。（逐次通訳あり）。

#### 【当日のプログラム】

開会のあいさつ 吉野太郎

#### ◆第 1 部 講演 13:00～

「ICT と市民活動・ジェンダー」

吉野 太郎（関西学院大学）

「現代中国のフェミニズムと ICT の多様な道」（Divergent Paths of Contemporary Chinese Feminism and ICTs）

Ip lam Chong（Lingnan University, Hong Kong）

「香港におけるオンラインポピュリストからフェミニストへのチャレンジ」（The Challenge of Online Populist Politics to Feminist in Hong Kong）

Lam Oiwan（Hong Kong In-Media and [globalvoicesonline.org](http://globalvoicesonline.org)）

「マスメディアとミニメディアをつなぐもの」

谷口 真由美 (大阪国際大学)

◆第2部 パネルディスカッション 15:40~16:30

パネルディスカッション司会：清末 愛砂 (室蘭工業大学)

総合司会：鈴木 晋介 (関西学院大学先端社会研究所)

(総合司会は関西学院大学のガブリエレ・ハード氏の予定だったが、都合により鈴木晋介氏が代役を務めた)。

報告—シンポジウムを振り返って

シンポジウムで、吉野太郎氏は、この20年間のICT(情報通信技術)と市民活動の関連について、講演を行った。日本におけるパソコン通信・インターネットを使った市民活動の関与が1980年代後半から始まること、最初は一部のインターネット等の資源にアクセスできる人による理念先行型のものであり、1980年代にアメリカで広まった運動や1992年のリオの地球サミットに起因することなどに触れ、現在のインターネットやパソコンがコモディティと化した現在の社会運動とインターネット活用を先取りしたフェミニズム運動について言及した。

IP lam Chong氏は、中国のフェミニスト政策とICTについて、1949年にその前身が発足した中国共産党の指導下におかれている中華全国婦女連合会(ACWF)、緩やかなネットワークとして機能しているジェンダーメディアアクション(GMA)のそれぞれの成り立ち、参加メンバーや活動について分析した。前者で活動を行っているのは国家公務員であり、後者にはジェンダー・フェミニズムについて学習しすでにプロフェッショナルである人が中心であること、GMAのメンバーが活動の中で当局から迫害をうけても、そのネットワークの緩やかさゆえにGMAそのものまでに影響が及びにくくなること、1990年代以降の中国本土におけるNGO活動は国家コーポラティズムといわれるが、市民活動や世論を制御することは難しくなっているとした。そしてIP氏の研究は、単に市民組織がどう生き延びるかということではなく新しいロジックでもって中国の中でどのような構造をとっていくのかに着目してきていること、これは技術そのものの力というより、一般の人たちの創造性にかかわっていると考える、とした。

Lam Oiwan氏は講演で、長らくイギリスの植民地であった香港でポピュリストという概念がいま起こってきているとした。香港でのポピュリスト政治のアイデンティティの要因は非常に強い地元意識が背後にあり、オンラインラジオ主宰者が政治家に転身する例も多いという。また中国本土からの旅行者や、中国本土の一人っ子政策のため、香港での出産をもとめる中国本土の妊婦をいなごに例えた香港住民の感情に訴えるビデオ「いなご天下」がネット上作成され高いアクセスを誇っている現状を紹介した。香港における出産数の35%が中国本土からの妊婦によるものだという。長い間、個人的なことは政治的なこととしてきたフェミニズムは、これらの動きに有効に対処できていないとした。課題として自らがこうむった苦しい経験を訴えていく際、個人的な経験の共有は、まさに個人的であって政治的であってローカルなものにとどまっているし、バイオポリティックスのなかで無視されている、また、現在のオンラインを使った動員は恐れや反抗心・反感を利用

した男性的なアプローチになっている。もっと対話的なアプローチが必要であり、フェミニストが持っている思いやりや団結しようとする方向性もそれにつながるとした。

谷口真由美氏は、関西のテレビ局の金曜日のレギュラーコメンテーターを務めた経験を持つ。その時のターゲットは「おばちゃん」ということだった。2012年の9月に、SNSのフェイスブックで「全日本おばちゃん党」というものを立ち上げた。上から目線の“おっさん政治”に突っ込みをいれていくことを目的としている。現在で1500人を超える賛同者がFacebookに集まり、設立時の勢いで開いたキックオフイベントには200人程集まり、ストリーミング放送やマイクロブログ（twitter）を介して広がっていった。なお、ジェンダーアイデンティティが女性であれば男性でも構わないことにしている。そうしたところ、関西ローカルといっても3局のテレビ局、雑誌、さらにはフランスや中国からの海外メディアからの取材があった。中国のメディアに逆インタビューし



たところ、マスメディアからの日本の情報は、日本からは国防軍を作り古い体制に戻すといったもので、それにノーを突きつける動きがあることを知ったからだというものであった。報道がなされているときに、ミニメディアがマスメディアで取り上げられ、さらに参加者が増えるという循環になっている。これは Win-Win の関係ではないだろうか。背後にあるキーワードは、「共感」そして「場」であろう。よくオンラインの場で相手をやりこめて満足する人がいるが、その先が大切なのだ、とした。

最後にパネルディスカッションが、清末愛砂氏を司会として、行われた。清末氏は4名の講演をまとめるのと同時に、清末氏の経験から、女性が ICT を使いだすきっかけとして貧困問題が大きいのではないかと指摘した。ディスカッションの論点として大きく分けて4点あった。1つ目として ICT のポジティブな面だけではなく、Lam Oiwan 氏の講演の「イナゴ天下」や日本におけるヘイトクライムへの活用など、ネガティブな面があることをどう考えていくかであった。2点目は、中国本土から香港に来て出産をする人への非難がおこる現状を打開するか、リプロダクティブライツの観点からはどうか、シスターフッドが成り立つか、などであった。3つ目は GMA のネットワークには弁護士や大学教員等のエリート層の参加に限られいわゆる底辺を拾うことができていないのではないかとというものであった。最後に、日本における問題として、フェミニズム運動が若年層に伝わっていないように思えることがある、それを ICT は変えていくことができるか？という会場からの質問によるものであった。

今回、海外から IP lam Chong 氏、Lam Oiwan 氏をお招きしてのシンポジウム・パネルディスカッションを行うことができたことを感謝する。このシンポジウムを通じて、日本の文脈のみで語られるいわゆるネット右翼の活動から生まれたヘイトクライムを、Lam Oiwan 氏が紹介した香港におけるポピュリズム発生の文脈を通じてみることで新しい視点を付け加えられることや、IP lam Chong 氏がすでにある研究結果から指摘するようにアラブの春の運動ではソーシャルメディア以外の個人ネットワークやテレビなどのオールドメディアがより役立っていることなどを再確認することができた。それぞれの地域で、フェミニズムやジェンダーの視点が求められていることも同時にわかったことといえるだろう。